

特別寄稿

コロナ感染拡大下における大学教育

——音楽学部における状況と検討課題——

志 村 聖 子

はじめに

相愛大学音楽学部は、前身の相愛女子音楽学校（明治39年（1906年）設立）から通算して115年を数える音楽専門教育の歴史に立脚する。2020年、新型コロナウイルス感染症という未知のウィルスの脅威は、音楽学部における教育のありようを揺るがした。執筆時点（2021年1月）では我が国で第三波が拡大しており、首都圏における緊急事態宣言が報じられ、欧州においても国境封鎖や都市封鎖が実施されるなど収束の兆しは見えない。

音楽学部音楽学科は演奏コース（声楽、ピアノ、管楽器、弦楽器、打楽器、創作演奏、オルガン、古楽器の各専攻）と音楽文化創造コース（作曲、音楽学、音楽療法、アートプロデュースの各専攻）から成る。また、音楽マネジメント学科（現在はアートプロデュース専攻に改組）には4回生が在籍している。

音楽学部における教育は、教員と学生が接触しながら音楽表現や理論、身体表現、呼吸法を扱うという特性がある。実技レッスンは、教員と学生の密接な相互関係のもとで行われ、この形態は脈々と受け継がれてきた伝統様式といえる。アンサンブルやオーケストラ、合唱のように複数ないし多数人が集まって学ぶことを前提

とする授業もある。これらの教育は閉鎖された空間にて、長時間密接に過ごす、いわゆる「三密」で行われてきた。

本稿では、コロナ禍における音楽学部の状況について、前期の対応を中心に記述する。

なお、筆者はアートプロデュース（AP）専攻及び音楽マネジメント学科の教員で、講義、演習、卒論指導を主に担当している。音楽学部の運営には教務委員会、音楽学科会、音楽学部教授会の構成員として関わってきたが、本稿において音楽学部の状況を全て網羅できるものではなく、情報に偏りがある場合は筆者の責任である。

2020年2月26日、政府より大規模イベント等の今後2週間の自粛要請が出され、翌27日には小中高校等の一斉休校の要請が出されると、全国の公立文化施設が臨時休館し、オーケストラやオペラ公演等も一斉に自粛する動きが生じた。この時点で大学の後期授業は既に終了していたが、3月に予定されていた卒業演奏会や学内オペラ『魔笛』等は非公開や中止となり、学生にとっての待望の舞台に大きな影響を与えた。また、卒業式は学部別に規模を縮小して開催され、卒業生と教員、助手が参列し、万感の思いで送り出した。

1. 前期当初の状況と 主な検討課題（4月）

（1）授業（実技レッスン等）遂行上の課題

3月中のコロナ感染拡大を受けて、4月3日に予定されていた入学式（全体式典）は中止、そして前期の授業の開始時期は、例年より10日間遅らせて4月20日からと設定された（3月12日大学評議会）。

新年度に入り、4月3日に臨時音楽学科会がメールにて開催された。授業実施についての課題や対応策について松本学科長から要請されたところ、翌朝にかけて教員から続々と返信が寄せられた。感染リスクに関する問題、考慮すべき点、考えられる対応策、健康への懸念、教育にかけられる想い…。その中で、特に授業遂行に関する問題点を取りあげると、以下のように集約できる。

①実技レッスンにおける問題と対応策

- ・管楽器や声楽は飛沫の観点から、個人レッスンや合奏が困難である。2mの距離を空けることは合奏において意味をなさない。
- ・対面でのグループ活動やディスカッションを重要視する専攻（音楽療法ほか）においても対策が困難である。
- ・個人レッスンの飛沫対策として、透明なプラスチック板で教員と学生の間を仕切ったり、楽器によってはマスク着用でのレッスンが考えられる。ただし、ある程度の部屋の広さが必要である。
- ・専攻楽器によっては、個人レッスンに関してはマスク着用とし、消毒や換気等に注意しながら対応することが可能となりそうである。

②オンラインへの対応可能性について

- ・対面での感染リスクや通学通勤のリスクを考

えた場合、オンラインでのレッスンを検討していくことも考えるべきである。

- ・卒論指導についてはオンラインでの対応が可能。学生も情報やファイルのやり取り等には慣れている。

- ・一部の必修授業など履修人数が多い科目は、相互のディスタンスが十分に取りにくく、現状の教室では実施が困難。

- ・教員がオンライン対応できたとしても、学生のネット環境や機器の整備状況を確認する必要がある。

③学外実習等

- ・音楽療法実習においては、実習先施設が実習生を受け入れることが困難になり、予定どおりの実施は困難。日程を変更（延期）せざるを得ないが、4回生の実習は卒業研究や認定資格とも関連してくるため、今後の対応が問題となる。

上記に合わせて、新入生オリエンテーション（4月8日）が対面で予定されていることについても懸念された。すでに大阪は東京・神奈川などと共に感染拡大危険地域とされ、店頭でのマスクの品切れの問題が顕在化し、入手できない状態になっていた。また、消毒用アルコールも品薄であった。「全ての行事予定を一旦延期して、その間に授業をどうしていくかを考えて行くべき」といった意見が出された。

④新入生への対応

4月6日、新型インフルエンザ等対策措置法に基づく緊急事態宣言が翌7日に発令されるとの報道が伝わった。これを受けて、新入生オリエンテーションは中止とすることが決定した。入学式もオリエンテーションもなく、教員が新入生と接する機会が当面はない状態となり、教員からの「新入生へのメッセージ」をオリエン

テーション資料に同封し、気持ちを伝えることとなった。

また、4月7日には、授業の開始日について「5月7日から31日は『対面に代わる授業』を実施し、6月1日からは対面授業を実施する」と決定され、これを受けて改めて授業準備を進めていくこととなった。

(2) 明らかになった課題

4月下旬になると、それまでの学生とのやり取りやレッスン等を通して、各専攻における学生の状況が徐々に明らかになった。その中で、対応すべき課題として学科会（メール等）で議題になったのは主に以下の点である。

①自宅で練習できない学生への対応のあり方

金管楽器をはじめ、楽器の特性や住宅事情等により、自宅で練習できない学生が多々見られる場合がある。ある金管楽器では、住居での音出しができる学生は一握りで、担当教授によると「練習用ミュートを使ったり、外で練習するなど工夫はしているようだが、とても上達を目的とした練習ができているとはいえない」との状況が共有された。オンラインでの遠隔レッスンは、自宅で音出しができ、かつネット環境が整っている限られた学生にしかできないとのことで、ステイホーム中の学生の練習をいかに考えるべきかが大きな課題であることが共有された。

「実技・演習系は、上達のために楽器を使用し、練習が絶対に必要」であるが、どうしてもそれが叶わない場合には「自宅でできる勉強方法などについて、学生と連絡を取り合い、先生方にフォローしていただく」必要があるといった意見が出された。

②遠隔レッスンについての課題

また、別の専攻ではオンラインの環境が整わない学生への対応についての課題が挙げられた。課題曲などを録音させ、音声ファイルの交換をして指導にあたる際に、従来のように45分や1時間といった時間単位で意思疎通できないため、数日かけてやりとりすることもある。その際にどのくらいをもって「1回のレッスン」と換算するかが問題になる。また、「先生方は工夫して遠隔レッスンを実施していても、学生から『遠隔レッスンを対面レッスンと同じ1回分とは考えられない』等の不満が来るような事態は避ける必要がある」といった問題意識も出された。

教員と学生とが「このレッスン内容で通常のレッスン1回に値する」という認識を共有することが望ましいが、「今の状況では、レッスン回数をこなすことではなく、内容を重視すべき」、「『レッスンは弾くものだ』と考えている学生が多いが、本を読んで勉強することも重要」との意見が出された。

③オンライン環境格差について

また、専攻によってオンラインの実技レッスンが進んでいるものの、学生の自宅環境によって内容に差が生じ始めていることや、自宅で練習できる学生とできない学生との間で学びへのモチベーションについても差が拡大していくことについて懸念が出された。ある楽器の担当教授は、「(オンラインの環境が整わない場合に)本人が一番苦痛を味わっているはずで、将来への希望より現在の不安が大きく、意欲減退につながりかねない」と学生の様子を慮っていた。

2. 立ち入り制限の段階的解除後の 状況や課題（5月以降）

①練習室の使用

5月14日、大阪府の独自基準による休業要請解除を受けて、キャンパスの学生立ち入り制限を段階的に解除することが報じられた。早速、学生達からは練習室貸し出しについて学内へ問合せが寄せられたという。ただ、制限解除とはいえ引き続き万全な感染防止対策が必要な状況であり、使用に関するルールの整備や周知に時間を要することとなった。

音楽学部内で検討会議が開かれ、音楽学科助手や教学課とも連携のもと、5月20日から練習室の貸し出しを開始することとなった。感染防止対策として、貸し出す部屋を限定し、学生一人の利用とするほか、完全予約制、予約は前日までとすること、検温、手洗い、手指消毒、換気を徹底すること、そして、自宅で練習できない学生を優先し、使用に不公平が出ないように配慮すること等がガイドラインに盛り込まれた。

②レッスン室の感染対策

6月1日から対面レッスンが再開できることになり、練習室以外のレッスン室についても感染防止対策が取られた。

声楽や管楽器の実技レッスン室においては、飛沫対策として、透明ビニールカーテンを天上から吊り下げ、教師と学生の間を仕切ったり、ピアノや創作演奏や副科チェンバロなど楽器を教員と学生が共に使用する楽器においては、手指消毒を行い、マスク着用、換気を図るといった対策を講じることになり、レッスン室のドア前には消毒液等が具備された。

また、教員が対応できる人数の関係から、一

斉に対面に切り替えるのではなく、隔週で対面レッスンとオンラインレッスンを併用することも考えられ、レッスンフロアにおけるネット環境の整備も必要となった。

③教室使用の問題

一方、密を避け、間隔を確保するために「広い教室」を使用したいとの要望が増加し、教室が不足気味となった。特に合奏や合唱のようにマスクを着用したままでは実施できない科目や、実習のように学生が教室内を動き回る授業の場合には、広い空間へのニーズが高まる。また、換気を兼ねて「窓を開けてレッスンをしてもらいたい」といった質問への対応や、教員や学生が対面授業とオンライン授業を連続して実施（受講）することも想定した LAN や教室整備の問題も挙げられた。

また、室内楽や器楽合奏のように複数人が集まることを根幹とする授業は前期の実施が困難と判断され、時期を変更（集中講義、後期）したり、専攻実技優先とする趣旨から一部の副科実技など2020年度は不開講となった科目もある。

④オンラインによる指導

レッスンや授業でオンラインを使用する場合、Teams や Zoom 等を活用したリアルタイムでの指導のほか、事前に収録した動画等を使用した指導、ポータルサイトの授業管理機能やメール等を利用したコミュニケーションが行われている。オリジナルテキストや参考資料、音源等の配信、課題の提示と提出のほか、チャット機能を利用したメッセージのやりとりなどが行われている。

⑤実習の実施～学外との関係について

教育実習や介護実習など、外部受入機関の協力が不可欠で資格取得に関係する実習については、日程を後期に変更するなど柔軟な対応がな

された。AP 専攻の演習では、学外の文化団体等との連携のもとで実施予定の催しやコンサートが軒並み中止となったが、「大阪クラシック」の特別企画（動画配信）において学生が企画・出演に携わる機会を得るなど、今年度ならではの展開もあった。

⑥演奏会等の開催への影響

8 月末までに学内で予定されていた演奏会の多くは中止・延期となった。ピアノ専攻の演奏会、創作演奏専攻の演奏会、金管アンサンブル演奏会が中止となったほか、サクソフォンアンサンブル演奏会の延期、相愛フィルハーモニア定期演奏会（7 月）の中止など、多数に及んだ。

また、学外の演奏会やオーディション、セミナー、フェスティバル等も中止が相次ぎ、学生達の活躍の機会に影響を及ぼした。

⑦海外との関係

新型コロナ感染拡大は本学と海外提携校との交流にも影響を与えた。招聘予定とされていた、バジジョ客員教授（声楽）、ボツォ客員教授（声楽）、ミリシェー客員教授（トロンボーン）、トマシク客員教授（ヴァイオリン）、ホーコン客員教授（打楽器）の来日が困難となり、マスタークラスなどが中止・延期となった。

五島みどり客員教授（ヴァイオリン）のマスタークラスはオンラインで実施された。

交換留学生についても、本学から海外留学予定の学生や、海外から本学への交換留学生の渡航が困難となっている。海外との交流の機会が失われ、学生の体験機会にも制約が生じている。

また、文化庁補助事業の「伝統芸能コーディネーター育成プログラム」では、2019 年度に続いて 2020 年度もフライブルク音楽大学との

交流を予定していたが、関係教員の渡航や招聘が困難となり、ブルフ教授にビデオ講義によるシンポジウム出演および寄稿をいただいた。

⑧実技試験（専攻実技）

専攻実技試験については、各専攻の楽器の特性や学生への教育的配慮などを反映して、以下のように決定された。

- ・単に試験を中止にすると学生の当面の目標がなくなり、学習意欲に影響するため、延期して試験を実施する（時期は授業終了時期、8 月、9 月など）
- ・演奏データと譜面を提出をさせ、専任教員が採点する。
- ・希望により実演、録音送信、レポート提出を選ばせる。採点はせず後期試験の点数で評価する。
- ・実技試験は実施せず授業内で評価する（平常点）。
- ・後期に 2 回試験を行い、1 回目を前期試験の評価とする。

⑨卒論指導

音楽マネジメント学科では卒論の中間発表会を 7 月に Zoom で実施した。発表に対するコメントをフォームに記入して提出、翌日にフィードバックを返却するなどして、手応えが感じられるように配慮した。

3. これからに向けて

新型コロナはまだ収束しておらず、感染拡大や長期化が心配される状況が続いている。今後への備えと検討課題については、以下が浮かび上がる。

①オンラインの活用

今後ますますオンラインを活用すべき状況が続く中、オンラインにおける「コミュニケーション

ョンの質」を高めていくことが求められるようになるだろう。オンラインでは、対面に増して言語化したり伝える工夫をする努力やマインドセットが必要となる。その際には、チャットや記録などオンラインならではの機能を活用することも有効であると考えられる。今後、全国の教育機関でも様々な事例やノウハウが集積していき、相互にグッドプラクティスを学んだり共有したりすることで改善していける途があるだろう。

②学生の環境格差の克服

今後、オンラインでコミュニケーションを取れることは、文房具を使うがごとく当然とされる時代になっていくだろう。我が国はIT化においてIT先進国の後塵を拝しているが、環境整備は待ったなしの状況である。また、学生の自助努力や経済的負担に帰するのではなく、教育インフラ整備の一環として公的な支援が不可欠である。

③適切な負荷とのバランス

前期の間、教員にとっては連日のオンライン授業準備やレッスン、業務等で忙殺される状況が続いた。例えば1コマ(90分相当)の授業をオンライン(オンデマンド)に切り替えるにも、従来口頭で説明していた内容をテキストに書き起こしたり、スライドを軽量化して受信し

やすくしたり、実態に合わせて扱う内容を改変するなど数時間~1日単位で新たな作業が必要となった。本学に限らず、自宅のPCで四六時中、テキストや課題、動画等の作成、送受信に対応する日々が続き、過労気味であるとの声は方々の大学教員から聞こえてきた。また、各科目で「出欠確認も兼ねて」課題が出されるため、学生にとっても「大量の課題」に追われる日々であったと聞く。過度な負担が継続することは教育効果や持続可能性の観点からも適切ではなく、望ましいバランスをどの点に見出すかが今後の課題となるだろう。

一方で、教員の立場からは、ステイホーム中のオンライン授業の利点も見つけられた。一例として、学生が自宅等で落ち着いてテキストを読み、考え、言語化する時間を持てたことが挙げられる。また、音楽と向き合う時間を持ち、音楽との関わり方を根本から考える機会を得られたことがある。困難な状況でも、学生とのやり取りの中で、学生に日々発見があり、学ぶことの手応えを感じられたことは、毎日を過ごす中で光明を見出しうることのひとつとなった。

以上、前期までの状況を中心に記録した。今後の備えの一助になれば幸いである。